Back Number

本論文は

世界経済評論 2018 年 7/8 月号

(2018 年 7 月発行)

掲載の記事です

世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
1,320円×6冊=7,920円 ▶ 6,600円 税込
17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典
定期購読期間中 デジタル版バックナンバー ※通巻682号以降 読み放題!!

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]
0120-223-223

お支払い方法
Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp 雑誌のオンライン書店

#MeToo 運動は全体主義的か

佐藤 紘彰

去る弥生の或る夕べ，World Policy Journal の編集長 Jessica Loudis を寿司に招いた。昨秋，この若い女性から寄稿依頼があり，そこで日本の男色の歴史を，20 年ほど前の三島由紀夫に関わる訴訟を軸にして書いていたからだ。夕食に寿司でもいかがと言うと，「大好き」とのこと。招いたのは三度目で，今度は同じく若い女性の編集次長と男性の編集助手の同僚二人も連れてきた。

その会食で，ふと，#MeToo の関連で Katie Roiphe をどう思いますかと尋ねると，ジェシカがすぐさま「あの人はひどい」との返事。ぼくがロイフィを持ち出したのは，Harper's 誌の最新号（4 月）の投稿欄に，ロイフィの最近の記事を「低級なジャーナリスティック基準」で書かれた記事だと居丈高に退けるものがあったからだ。投稿者は Astra Taylor。調べると，カナダ系アメリカ人のドキュメンタリー映画製作者，音楽家，activist とある。

ロイフィの名はぼくはかなり前から記憶に残っている。セクハラ問題が大きく前面に出始めの頃，「campus date rape では女の方にも責任がある」との意見がぼくの目を引いていた。大学生がパーティの後や一緒に酒を飲んで多少酔って部屋に行ってセックスをする。翌朝，後悔した女が「rape だ」と叫ぶ。これでは一方的にすぎる，という。アメリカでは大学の多くが学生寮を持つ。そこで学生同士のセックスは簡単だ。

この rape という言葉について，美術館の学芸員をしている名古屋の友人に「日本では“強姦”という言葉はあまり使わないと聞くが」と尋ねたら，「たしかに，つかったこともなければ，使われているのもほぼきいたこともない」とのこと。このことから日本とアメリカの違いを云々するのは早急かも知れないが，アメリカの問題の一つは，そうした強烈な，誇大な（hyperbole）言葉を使いすぎるのも問題かも知れない。早い話，rape はまだ行為が理解できるが，頻繁に使われる abuse は何を指すのか。また sexual violence にしても，キスや腕に触るといった inappropriate や unwanted と形容される行為を含むのだろうか。

編集長の反論

今 Wikipedia では，ロイフィが The Morning After：Fear, Sex and Feminism と題する本を出したのは 1994 年とあるが，ぼくは，その論点を出版前の記事で New York Times か何かで読んだとの記憶がある。ロイフィは言う。

「（学園の）rape を定義する問題の一つは，『したくもない性交をしたのは男がアルコールや麻薬を飲ませたからなのか』という点だ。そうすると主体性の問題が出てくる。女はなぜ自分がアルコールや麻薬の摂取に責任を持たないのか。男が提供したかもしれないが，飲んだのは女である。もし女が全く無力でもナイーブでもないと想定すれば，女は飲んだり麻薬を取る選択に責任を持つべきだ」。

時に，本を出したロイフィは弱冠 26 歳。ラドクリフ/ハーバード卒業後プリンストン大学で文学博士を目指していた。父はニューヨークの精神分析医，母は作家かつジャーナリストのアン。アン・ロイフィは「矛盾で溢れる free-thinker」「第一世代のフェミニスト」と呼ばれる。なるほど，娘のケイティは初めから毛色が違うフェミニストだったわけだ。

ロイフィの議論はぼくには正論のように思われる。しかし別の意見も見ておくべきだ。そこで寿司の夕べから二，三日あとジェシカに連絡し，この前はロイフィは「ひどい人だ」と言っただけで終わったがと言うと，自分の考えはこうですと次のように説明してくれた。

「私は，女を（故意であれ，そうでないにせよ）犠牲者として扱う運動には問題があると思う。他方，ロイフィは性的暴力を，状況あるいはもっと込み入ったダイナミックの結果としてより，女ができる選択の結果と規定する点で反対方向に行きすぎる。ロイフィはキャンパス強姦が一般に神話だと主張する本で有名になった。私は，無闇な敏感性や，バカな行為やコメントが大げさなこともあり得るし，その結果，男の人生を台無しにする可能性については慎重だ。しかし，ロイフィは構造的セクシズムは存在しないと信じているようで，それは裕福で高い教育を受けた白人女性が持つものとして奇妙であり，いくらか（現実に対して）音痴だと思う」。

思想警察国家

#MeToo は，端緒 2006 年とするというが，去年秋から突然有名になった。セクハラ苦情（complaint）がソーシャルメディアに拡大したもので，従来のセクハラの指弾が一つの組織体で起こる場合が多いのに対して，#MeToo は組織の枠がない。また，従来のセクハラでは指弾者が無名のままでいることが法制的弱点と言われたが，#MeToo ではその無名性が強まった。同時に苦情，非難の度合が強まり，この「フェミニスト運動」に反対する人に対する風当てが強くなった。

先に触れたドキュメンター映画製作者テイラーの手紙はその典型だ。手紙は，ロイフィの記事（Harper's 3 月号）を「女は男の性的行為に対してヒステリックな過剰反応に陥りやすいという，何十年も古い自分の議論を蒸し返している」と退ける。ロイフィによると，この記事を書いていることが伝わると，「強姦賛成者」「人間の屑」「ガミガミ婆」「妖怪」「嫌な女」などの罵り言葉を初めとして，「ロイフィがこの記事を出したらキャリアは終わる」などの脅しを受け始めた。直接の理由は，Shitty Media Men という crowdsource のリストの作成者の名を暴露するとの「うわさ」が広まったからだという。

出たロイフィの記事は“The Other Whisper Network：How Twitter feminism is bad for women”と題する。“whisper network”はセクハラをしたとされる男たち名指しで内々に（「囁き」）連鎖的に回すことを指すが，「別の（other）」というのは，そういう指弾に懐疑的で，#MeToo 式の「Twitter feminism は女に良くない」と信じながら，意見が知られればひどい批判を受ける。だから，それを恐れて黙っている女たちの「ネットワーク」を指す。

ロイフィはこの記事を書きながら，かつて“The Morning After”が出て書店で本から朗読することが決まると「殺す」という電話恐喝がいくつかあり，そのため何人かの警官が本屋に配置されたことを思い出す。現在のアメリカは，その点，思想警察国家を思わせ，全体主義的空気を思わせるという。

そういえば，この春，フランスでは著名な public intellectual である Julia Kristeva が出身国ブルガリアのスパイだったと話題になった。調べると話の根拠が希薄と分かったというが，これを報じる中で New York Times は，スパイの噂とは別に，クリステヴァは「共産主義にせよ，アメリカ流の identity politics にせよ，全体主義の一種」と退けていると添えた。

セクハラも，最近の #MeToo も，そうした identity politics の良い例だろう。どちらも原則的に女を永遠的に弱い，「主体性」を持たない人間として扱い，男は絶対的な権力を持つとする。

さとう・ひろあき　日本文学英訳家，文筆家